

【報告】「下田市文学シンポジウム」を開催しました！

“下田の文学の魅力”を再発見！

[日 時] 令和5年11月21日 13:00～16:30（受付開始 12:00 開場 12:30）

[会 場] 下田市民文化会館 大ホール

[来場者] 301人

静岡県による「伊豆のふるさとと文学 2023」の開催に合わせて、伊豆半島の中でも、天城を南に越えた下田という地にスポットを当て、“再生”というキーワードから、その文学の魅力や下田の魅力を再発見するためのシンポジウムを開催しました。

市内外から多くの方が参加され、あらためて下田の文学の独特な魅力や豊かさを発見する機会となりました。

【下田市文学シンポジウム内容】

【開会挨拶】 下田市長 松木正一郎 13:02～13:05



【第1部 基調講演】 13:10～14:40

基調講演：「三島由紀夫、海そして下田」

〔講 師〕 平野啓一郎氏（芥川賞作家、『三島由紀夫論』で第22回小林秀雄賞を受賞）

講師プロフィール

1975年愛知県蒲郡市生。北九州市出身。京都大学法学部卒。

1999年在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により第120回芥川賞を受賞。

以後、一作毎に変化する多彩なスタイルで、数々の作品を発表し各国で翻訳紹介されている。

著作に、小説『葬送』、『滴り落ちる時計たちの波紋』、『決壊』、『ドーン』、『空白を満たしなさい』、『透明な

『迷宮』、『マチネの終わりに』、『ある男』等がある。

2023年、構想20年の『三島由紀夫論』を遂に刊行。

三島の思想と行動の謎を解く、令和の決定版三島論。小林秀雄賞受賞。

〔講演内容〕

8月に『三島由紀夫論』で小林秀雄賞を受賞された現在活躍中の著名な芥川賞作家、平野啓一郎さんが三島由紀夫と下田の関係について講演して下さるという事で、市民を始め、平野ファンや三島ファンが期待に胸膨らませるなか、講演が始まった。



平野さんは、下田は三島とのゆかりが強い土地なのでいつか訪れて見たいと思っていたが、下田まで足を伸ばすことはなかった。「この講演のため、昨日下田東急ホテルに宿泊することとなり、ホテルや図書館の人に三島のゆかりの地を案内してもらった。本人の存在を感じ取ることができた。」と語った。

また、市内に三島由紀夫と交流した人が何名かいらっしやることを知り、「三島は日本だけでなく世界でも関心の高い作家なので、その証言は日本及び世界の文学研究の貴重な資料となる。」と指摘し、生前、三島と地元の人がどのように交流したのかをインタビュー動画を作成・保存し、ホームページ等で公開することを提言した。

三島由紀夫と下田との関係について語るにあたり、まず、三島由紀夫の創作活動をおよそ4つの時期に区分し、三島が下田に来るようになったのは、第3期の終わりの39歳の頃1964年であるといわれており、「ちょうど、スランプ期のまっただ中であつた時期から第4期の政治思想運動を活発させた時に、毎年1ヶ月近くを過ごしていた。」と語った。その上で、「あらためて、下田に来て昨日から考えていたのだが、確かに下田は海もきれいでいいところですが、毎年7年間、1ヶ月つづけて滞在し続けたのはあまりにも長すぎる。何がそんなに彼を引きつけていたのか」と指摘した。

三島は第3期の『午後の曳航』の頃から、死のことを具体的に考えはじめ、第4期の三島は、ひたすら死のことを思いつめ、特に割腹自殺の昭和45年、1970年に近づけば近づくほど計画も具体化していくという中で、下田に滞在し家族と過ごしていたときの心境を、家族を大切にする気持ちと具体的に死を考える中で「なかなか複雑な心境だったのではないかと推察した。その上で「そのような心情を抱えた中で、下田の人達となにげなく日常接して、楽しいことがあったり、住民の笑顔に接することが、ささやかな心の慰めになっていたのではないかと語った。

また、三島の海の描写について、「三島の作品の中で描かれている海の捉え方は、実はそれぞれかなり異なっている。」と指摘した上で、三島の代表作の中で、三島がどのように海を違った形で表現してきたかについて、平野

さんの朗読を交えながら具体的にみていった。『仮面の告白』のエロティックでかつ残酷で死を思わせる存在としての海や、『潮騒』の海の描写が三島の小説の海の描写の中で最も端正であることや、『海と夕焼け』『豊饒の海』などの海の表現や認識について紹介した。

【参加者の感想】

- ・平野さんの声がよく、聞きやすかった。
 - ・多面的でわかりにくい三島の人生を4つの時期に区分しわかりやすく説明してくれた。
 - ・改めて、三島由紀夫に興味を持つことができ、もう一度作品を読んでみようと思った。
- ★アンケート結果から、参加者の満足度が高く、大盛況だった。

【第2部 パネルディスカッション】 14:55～16:30

パネルディスカッション：[テーマ] 再生の地としての“下田と文学”

[コーディネーター] 土屋知美氏（SHK アナウンサー）

[パネリスト]・渡邊 紘氏「山頭火、転生の伊豆路」元静岡県立下田北高等学校校長

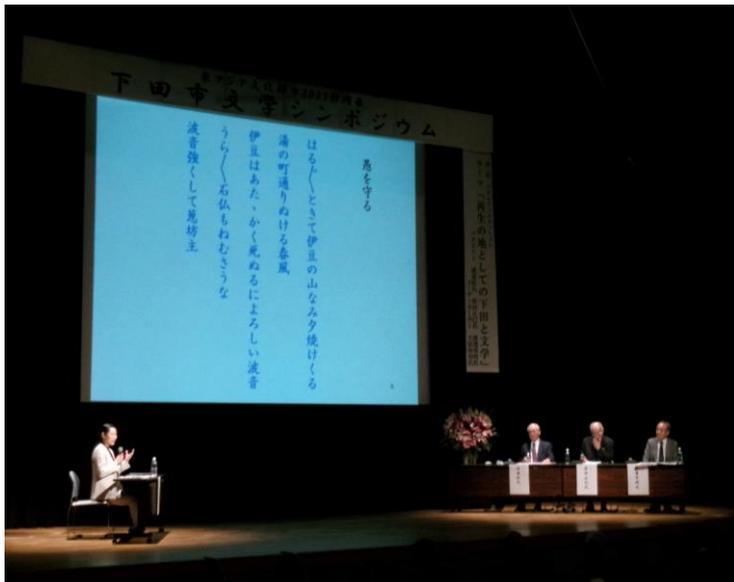
・原田正己氏「『伊豆の踊子』における再生」元静岡県立下田高等学校校長

・渡邊秀明氏「山本周五郎と『竹柏記』」元下田市立下田中学校校長



まず、3人の地元研究者の方々により、各専門分野の作家や文学作品から「再生の地としての“下田と文学”」をテーマとして発表していただき、その上で抽出される「天城峠の南側の文学」「交通インフラの変化と文学」「温泉と下田の文学」「下田の海や港町と文学」「下田の文学のこれから」などの論点についてコーディネーターが質問しながら話を深めていった。

【渡邊 紘氏「山頭火、転生の伊豆路」】



山頭火が其中庵で2度目の自殺未遂をし、死に場所さがしの旅で伊豆に入ったのは、昭和11年4月の半ば過ぎのことだった。網代笠を深くかぶり、黒い法衣で頭陀袋を下げた一介の乞食坊主のような姿で俳句仲間を訪ね巡り歩いた。

河津の松木一郎さん、柿崎の土屋兔子さん、下賀茂の佐藤専子さんを訪ね歩くなかで、その家族の素朴な歓待と人情、伊豆の天地自然（燕、若葉、山々、海、気候の暖かさ）と出湯と酒に癒やされて転生していった。その山頭火の伊豆路について、彼の詠んだ俳句を紹介しながら語った。

最後に、山頭火の晩年の境地、悲しい諦めである「愚を守る」について語り、山頭火の句をすばらしい声で朗詠して終わった。朗々とした声の中に山頭火の境涯を思った。

[参加者からの感想]

- ・話が簡潔にまとめられていて、わかりやすかったし、面白かった。
- ・山頭火はなじみがなかったが、知りたくなった。
- ・声が素敵でした。

などの感想が寄せられた。

【原田正己氏「『伊豆の踊子』における再生】



『伊豆の踊子』について、これまでの「淡い初恋物語」ではなく、「学生靴」と「太鼓」の重さに注目し、「傷魂の救済物語」「傷ついた魂の再生物語」として読み直す解釈を提示した。「学生靴」の重さは「天涯孤独の息苦しさ」であり、「太鼓」の重さは「社会的下層者・女性差別」である。

現地伊豆で読み直すと、「学生」と「踊子」、そして『伊豆の踊子』執筆で悲恋の苦悩から脱却を図った筆者川端康成、3人の「再生物語」「傷ついた魂の救済物語」であることがわかり、大正7年の伊豆の旅で「孤児根性に歪んだ息苦しい憂鬱」から救われ、7年後『伊豆の踊子』の執筆で初恋の人「伊藤初代」との悲恋の苦悩からも救われたのではないかと語った。

そして、実在した船の中の少年（豆陽中学4年生・後藤孟氏）を紹介し、『伊豆の踊子』は「少女」と「少年」に救済される物語でもあるとした。

[参加者からの感想]

- ・先生の解釈に感銘を受けた。
 - ・先生の研究や考察はわかりやすく聞きやすかった。
- などの感想が寄せられた。

【渡邊秀明氏「山本周五郎と『竹柏記』」】



蓮台寺温泉にゆかりのある作家、山本周五郎を取り上げ、蓮台寺と関わりのある『竹柏記』を中心に再生の物語を語った。

周五郎は昭和8年から蓮台寺荘に逗留した。離れの2階の萩の間は執筆の部屋、「菫の間」は担当編集者の部屋だったことや、旧蓮台寺荘の入口には『竹柏記』の主人公孝之助の切ない言葉が記された文学碑が残されていることを紹介した。

山本周五郎が描くものには、社会的弱者、貧困生活者へのまなざしがあり、周五郎文学の特質について、下田行きのバスでの車掌さんのエピソードや、牧野富太郎博士の言葉などを交えながら向日性や他者の痛みを想像できるケアという視点からその文学の魅力と再生の力を語った。

[参加者からの感想]

- ・わかりやすく聞きやすかった。
- ・山本周五郎と下田の関わりについて知るきっかけとなった。

【閉会挨拶】 下田市教育長 山田貞己 14:30～14:33

